

少年少女短編名作選

ふしぎなふろしきづつみ

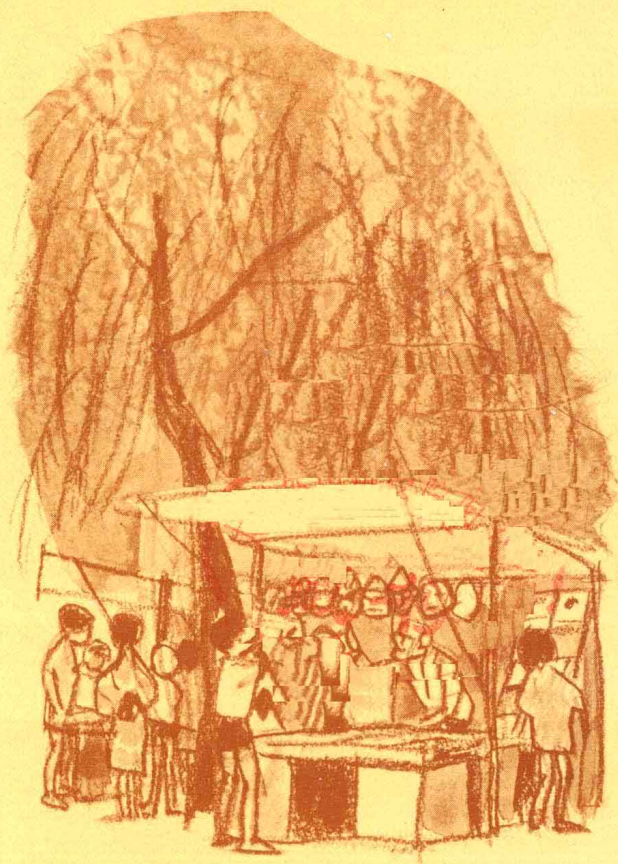
前川康男



少年少女短編名作選

ふしぎなふろしきづつみ

前川康男



実業之日本社

NDC 913

少年少女短編名作選

ふしぎなふろしきづつみ

前川 康男著

実業之日本社

1973年

本文10ポ活字使用 192ページ 20.5cm

小学校上級～中学生むき

検印省略

ふしぎなふろしきづつみ

1973年12月10日 第1版第1刷発行

著 者 前川 康男

発行者 増田 義彦

発行所 株式会社 実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9 (☎104)

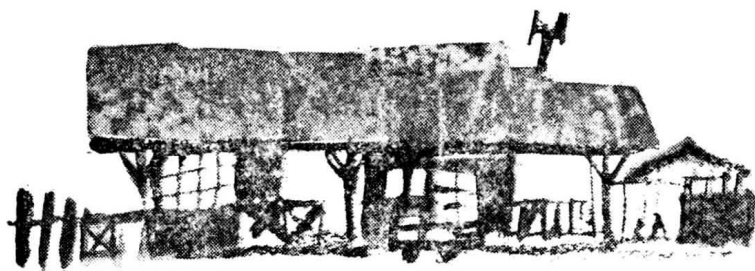
TEL03(562)4311 振替 東京 326

印刷所 株式会社 東京研文社

©Yasuo Mackawa 1973. Printed in Japan

8093—804581—3214

ふしぎなふろしきづつみ



● もくじ

ふしぎなふろしきづつみ

5

かもしかと白いモーターボート

17

鳥怪人のお面

23

短い短いキツネの話

ちことのふ

ひげ男になった少年

三角山^{さんかくやま}のひげ男

解説^{なかむらこうぞう}(中村浩三)

井 口 文 秀

一九〇九年富山県生まれ。太平洋画会研究所修学。

日本調の格調高い童画美術で知られる。代表作として絵本『コーリャよはばたけ』『せんなじいとクマ』などがある。

そうてい 村上美術

山のふもとに、小さな町がありました。

町のはずれに、小さな駅がありました。

山のふもとの、小さな町の駅ですから、小さい小さい駅でした。

駅には、駅長さんと、わかい駅員さんが、ふたりいるだけでした。

ある夏の日の、午後のことです。

列車がでたあと、わかい駅員さんが、待合室まちあいしつのそうじをしていました。

「おや？」

駅員さんは、いすの下をのぞきました。

「落とし物だ。」

いすの下に、こい緑色みどりいろのふろしきづつみがころがっていたのです。

待合室まちあいしつには、だれもいません。

「ははあ、さっきでた上り列車のぼりのお客きやくさんが、わすれていったんだな。」

駅員さんは、いすの下に手をのばして、ふろしきづつみをひろいました。

古ぼけたふろしきで、中には、四角い、箱はこのようなものはいっています。木の箱はこのようですが、あまり重くありません。たて横二十センチぐらいの、まっ四角なふろしきづつみでした。

「なにがはいっているのかな……。」

駅員さんは、ふろしきづつみに耳をあててそっとゆすってみました。

なんの音もしません。

「なんだろう……。べんとうにしては、軽すぎるし、おかしの箱はこかな……。それとも、くだものかな。いや、この大きさと重さからすると、ちゃんのような、せとものかもしれない。」

いろんなことを考えました。

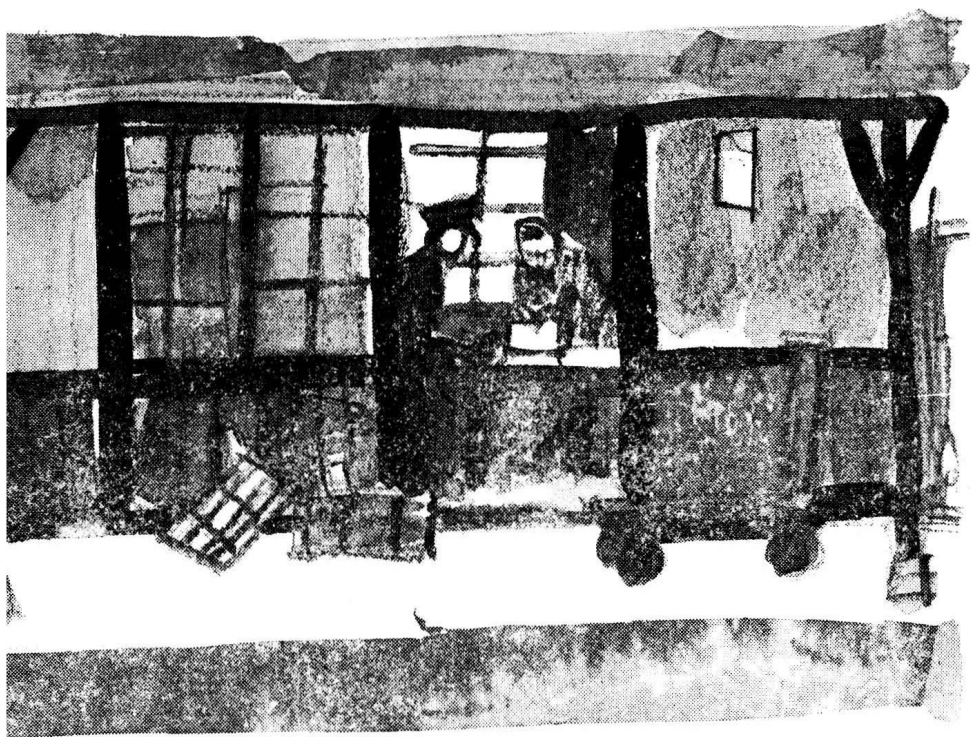
「ひょっとすると、たいへんなたからものかもしれないぞ。」

わかい駅員さんは、ふろしきづつみをほどこいて、中が見たくてたまらなくなりました。

「いや、待て待て。お客さんきやくさんのわずれ物を、かってに見てはいけない。」

駅員さんは、じっとがまんして、ふろしきづつみを持って、駅長さんのところへ行きました。

「こんなふろしきづつみが、待合室まちあいしつに落ちていたんです。」



駅長さんは、銀ぶちのめがねをかけて、ふろしきづつみをじっとながめました。

「ほほう、なにがはいっているんだらうね。さっきの上り列車のお客さんは、……ええと、おりたのが七人、乗ったのが五人だったね。列車がでてから、もう十分いじょうたっているから、おりた人が落としたのなら、取りにくるはずだ。きつと、あの列車に乗った人のだね。」

駅長さんも首をかしげました。

「おもちゃじゃないかな、びっくり箱のような。あけると、ぴょうんと、ばねじかけの人形がとびだす……。」

すると、わかい駅員さんは、ちょっと気味のわるそうな顔をして、こういいました。



「駅長、ダイナマイトみたいなものは、
はいっているんじゃないでしょうね。び
っくり箱^{ばさ}ならいいけれど、時^じげんばくだ
んがしかけてあって、ふたを取ったら、
ドッカーン……。」

「おいおい、おどかしちゃいけないよ。
だが……、このごろは、よくそんなこと
が新聞にのっているからなあ。」

「そうですよ。ひどいいたずらがはやっ
ていますからね。こんな小さい駅、一発
で、ふっとんでしまいますよ。」

ふたりは、うで組みをして、考えこみ
ました。

「駅長、こんな紙きれが、はさんでありました。」

わかい駅員さんは、ふろしきづつみのむすびめから、白い紙きれをつまみだしました。

「ほほう、こりゃ荷ふだだ。」

それは、細いはりがねのついた荷ふだでした。荷ふだは、小さくたたんで、むすびめの下におしこんであつたのです。

「どれどれ。おや？　こんなことが書いてあるよ。」

駅長さんは、荷ふだをひらいて読んでみました。

すぐに、あけてください。

荷ふだには、そんなことが書いてあつたのです。

「すぐに、あけてください……、そうすると、早く食べないと、くさってしまう食べ物かもしれないね。」

駅長さんが、そういうながら、荷ふだをひっくり返すと、うらにも字が書いてありました。

外であけてはいけない。

「ふしぎなふろしきづつみだね。すぐに、あけてください。外であけてはいけない。……こりゃあ、いったい、どういうことだろう。やっぱり、なにかあぶない物でもはいっているのかもしれないぞ。」

ふたりは、クイズでもとくように、汗あせをふきふき考えました。

「外であけてはいけないということは、うちの中であけなさい、お日さまの光にあててはいけない、という意味いみでしようか。」

「そうだ。なるほどね。」

どうも、いくら考えても、さっぱり、わけがわかりません。

そのとき、駅長さんは、窓まどから顔をだして、

「おうい。」

と、大声をあげました。駅の前の道を、ちゅうざい所のおまわりさんが歩いていたので、鼻はなの下にひげをはやした、ふとったおまわりさんは、駅長さんの声に気がついて、駅へやってきました。

「じつはね、ふしぎなふろしきづつみなんだよ。なにがはいっているのか、見当がつかないんだ。」

駅長さんの説明を、おまわりさんは、

「ふうん、ふうん。」

と、うなずきながら、聞いていましたが、

「なるほど、かわった落とし物だね。荷ふだはついているけど、名まえも住所も書いてない。時げんばくだんだとたいへんだが……、でもばくだんにしては、すこし軽いな。ともかく、三人であけてみようじゃないか。荷ふだには、すぐにあけてくださいって、書いてあるんだから。」

と、いいました。

「だいじょうぶかな……。」

駅長さんは心配そうです。

「わたしはね、この箱には、動物がはいっているんだと思う。」

おまわりさんがいいました。

「へえー、動物だって？　動物だとすると、どんな動物だろう。ねずみ、りす、小鳥、かえる、もぐら、それとも、うさぎ。いや、うさぎにしては、箱はこが小さいね。」

三人は、いろいろな動物を考えました。

「駅長、もしかすると、へびじゃないでしょうか。まむしなんかはいついていたら、こまりますね。」

わかい駅員さんがいました。

「おい、おい。きみは、ぶっそうなことばかりいうね。」

駅長さんは、へびがきらいらしく、二、三歩、うしろにさがりました。

「安心しなさい。まむしがでてきたって、わたしが、ちゃんとつかまえる。」

おまわりさんは、白い手ぶくろをはめると、ふろしきのかたくむすんだむすびめをほどき、木箱きばこのふたを、ギツギツと、あけ始めました。木箱きばこのふたには、小さいくぎが打ってあったのです。

おまわりさんも、用心して、しんけんな顔をして、ゆっくりゆっくりあけました。

そのとたん、三人は、

「あっ。」

と、声をあげました。

カサッと、かれ葉をふむような、かわいた、かすかな音がしたかと思うと、ぱっと、三人の目の前をかすめていったものがあつたのです。うす茶色のすきとおつたもの。

「やんまだ。」

「おにやんまだ。」

一ぴきのおにやんまが、箱はこから飛びたち、二、三回、三人の頭の上をまわつたかと思うと、窓まどから、すっと一直線に空へまいあがつて行きました。

木箱きばこの中には、草がしきつめてあり、その下に、こんな手紙がはいつていました。

にいさん、きょう、おばあちゃんが、そちらに行くので、おにやんまをおみやげにしました。病氣びようきをふつとばして、早く元気になってください。これは、牧場のぬまぬまでつかまえたおにやんまです。東京とうきょうの空に、はなしてやってください。

新吉しんきちより